

菊

中山
菊



おえ
の
人

中山義孝



昭和二十六年十一月二十六日 印刷
昭和二十六年十一月三十日 發行

定價 貳百圓
地方 賣價 貳百拾圓

著 者 中 山 義 秀

發 行 者 佐 藤 義 夫
東京都新宿區矢來町七十一番地

發 行 所 株 社 新 潮 社
東京都新宿區矢來町七十一番地

電話九段(33)二一—二五
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

目次

霧にゆらぐ藤浪

五

寂光の人

一〇一

平手造酒

一五三

表紙繪
木
村
莊
八

寂
光
の
人

霧にゆらぐ藤浪

一

寛喬雄をさして悪人だといふ者がゐる。

「彼は氷のやうな心で生きてゐる」

しかし寛は人間の理想とか眞理などといふものを、あまり信用してはゐない。むしろ兒戲に類した觀念の遊ぐらゐに考へてゐる。彼の視野にうつるものは、生活の大河を浮き沈みして流れてゆく人間の大部にすぎない。

「悪人も善人もない。一切が無だ」

さういふ寛の厭世觀は、彼が寺院に育つた少年時の環境からきてゐる。寛も一度は僧侶になるはずであつた。しかし青年の頃、嫌氣がさして寺院をとびだしてしまつた。それからすでに、三十年ちかい歲月が流れさつてゐる。

寛は戸籍の上では、富山縣地方の農民の子になつてゐるが、彼は生れてよりこのかた自分の

兩親に會つたことがなく、その名も知らないくらゐだから、勿論生家を訪れたこともない。彼にとつては見ず知らずの赤の他人と同じである。

算はもの心つく頃から、寺の稚兒として育てられた。他にも同様な子供たちがゐた。いづれもそれぞれの事情や境遇によつて、兩親との俗縁をたち佛の御弟子として寺院に預けられたものである。

寺院は北陸の巨剎である。二十餘人の寺僧の上に、山主とよばれてゐる住職が居つて、一山を統べてゐる。山主以外は妻帯して、寺院の附近にすんでゐる。

寺院の本尊は、木像の不動明王である。千年の昔、藤原純友の亂を調伏するため、高野山からはるばる運ばれてきたと傳へられてゐる。一木作りの巨像で數百年の間風雨にさらされ、荒野の荊棘の中に埋れてゐた。

いつの頃堂内に安置されるやうになつたのか、はつきりした年代はわからない。寺院の縁起にはものものしい由來が記されてゐるけれども、後代の假作である。

寺院が參詣の群集で賑ひだしたのは、徳川幕府の末期にちかい時分からである。水野忠邦の贅澤禁止令にふれて、大阪歌舞伎役者の巨頭が追放されたことがある。彼は三年間ほどの寺院内にかくまはれ、罪をゆるされて歸つた後お禮のために不動靈驗記を芝居にしくんで上演した。

それが大當りをとつて、寺院の名は全國にひろまつた。寺院の水垢離堂にこもつて三七二十一日の祈願をこめれば、いかなる願望もかなへられると信じられてゐる。また寺院が出してゐる家内安全、商賣繁昌の大護摩札や身替りのお護札を持つてゐれば、一切の厄難から免れられるとも信じられてゐる。あるひは不動尊に獻じた金や財物は倍額になつてかへつてくるといふ信仰も俗間に流布されてゐた。

それで全國各地に五百人、千人といふやうな信者の講中ができて、先達の法螺貝の音にみちびかれ毎年この地へ參詣にやつてくる。金錢や財寶はもとより、田地や山林を寄進する者も少くない。現在の宏壯な堂宇や宿房、山内の諸設備も、すべて信徒の寄進によつてできあがつたものである。

明治維新後寺院が一時さびれたことがあつたが、三代前の住職が傑物でふたゝび昔の繁榮をとりもどした。彼は京阪の演劇、花柳界の方面から東京のはうまで手をのばして金をばらまき、寺院の宣傳につとめた。

その一方男女の中等學校や感化院、圖書館、幼稚園などを新しく設立して、寺院の表看板にした。中央の學界や社會事業團體への寄附も惜しまない。回光山遍照寺の不動尊は信者の淨財を獨占して、私利をいとなんでゐるものではないことを社會にしめすためである。

その時分すでに鐵道が通じてゐたが、後に電車も開通するやうになると參詣者の數はいよいよ増えてきた。人口六、七千の町が、この寺院一つで持つてゐる。町全體が參詣者のための旅館、土産物屋、飲食店だといつてよい。戦前、稅務署の査定額が二百萬圓にものほり、町役場はもとより地方政廳も寺院の勢力を無視することができなかつた。

寺院内の行政は、山主の獨裁制である。寺の執事は山主の意志を代行し、二人の檀家總代は理事として山主や執事の相談にあづかることになつてゐる。檀家總代は講中を多く持つた、家の古い旅館の主人である。この町では僧侶と宿屋の亭主が幅をきかしてゐる。

昔、山主が塗駕籠にのつて町内を巡錫すると、町民はその前に土下座した。今でも山主が宿房の奥の院から、渡殿を通つて本堂の護摩壇にのぼる時には警蹕の聲がかゝり、お供の草履持や下男等は地に膝まづく。

山主は一代制である。寺法として妻帯をゆるされない。そのかはり愛妾を他の地に蓄へ、京阪各地で豪遊するのは山主の自由である。

次の後繼者は獨身の寺僧の中から、山主が遺言によつて定めることになつてゐる。檀家總代がその遺言にたちあふ。

寺院から山主にだす俸給は僅かだが、身替り札の賣上は全部山主の收入となる。これが戦前、

毎年十萬圓以上あつた。そのほか信者の獻金がある。

二十餘人の寺僧の月給は二十圓である。これで妻子を養ひ家を建て田地まで買ふことができた。寺院内にそれぞれ持役があつて、祈禱代、香代、蠟燭代、その他の役得があるからである。

寺で使つてゐる事務員、下男、庭掃き、植木職、大工、風呂番、賄、飯たき、お供の奴などの手當は、さらに少いわけだが、彼等にもそれぞれ役得がある。世帯が大きいので材料をくすね、その上前をはねることなど何でもない。人夫等は月末に賽錢を収めはこぶ時、はいた足袋のすき間に紙幣をおしこむ。

賽錢箱の中には戦前、百圓の多額紙幣の入つてゐることが珍しくなかつたが、箱をあけた際立會の役僧があらはじめ紙幣だけを選びだしておく。人夫達はその隙をねらふわけだ。

山主の豪遊や蓄妾が大目にみられてゐるやうに、かうした小者等の小さな犯行も見えて見ぬふりをされてゐる。寺院は官省でも會社でもないから、よそからの掣肘や干渉はない。

寺院は町の中央をしめる丘陵の中腹にそびえたつてゐる。緑青をふいた銅の屋根、朱塗の圓柱、廻廊をめぐらした大伽藍である。伽藍の前に青銅の燈籠が二基左右にならんでゐる。

階段をあがると廊下、その先に大きな賽錢箱がある。賽錢箱の奥は疊を敷いた内陣だ。正面

に壯麗な護摩壇が金色燦然とした光彩をはなつてゐる。護摩壇の後に不動明王の尊像がたつてゐる。大きすぎて顔が見えない。幾百年間の香煙にいぶされて佛體がまつ黒にくすばつてゐる。

本堂の圍の下は廣場になつてゐる。廣場の右に水垢離堂、左にいくぶんあがつて寺院の宿房がある。築地の塀でかこまれ奥は庭園になつてゐる。宿房から本堂に渡殿が通じてゐる。

本堂背後の石段を登ると奥山である。數萬坪の廣さをもつた公園で、松山があり芝生の丘があり叢林があり梅林、竹林、梵字の池があり林池の美をつくしてゐる。しかしいたる所に信者や講中のたてた石碑や石塔があつて、それに金千兩とか金五百兩とか記され、俗臭鼻をつくものがあつた。

俗臭といへば伽藍全體、いや町全體がなんとなく阿堵物くさい。寺も町も金まうけに狂奔してゐる感じである。護摩料をあげると講中のゐる宿屋に、寺の精進料理の折詰や記念品がとゞけられてくる。大口の寄進をすると宿房の奥の院に招待されて雛僧や寺僧たちが接待につとめ、山主みづから挨拶に出てきて饗應に手をつくす。

もともと芝居者、花柳界、株屋などに信者の多い寺だが、かうなると信者の機嫌をとる營利會社も同様である。とても佛の智慧をもつて諸障礙を排除し煩惱を鎖斷する神聖な靈場どころ

の沙汰ではない。

幕府時代から明治の初年にかけて、町の沿道には乞食が充満してゐた。参詣者あてこみの博徒も多かつた。また参詣を口實に賭博が目的でやつてくる人々も少くない。俗臭にみち阿堵物くさいのは當然であらう。

二

箕喬雄はかういふ環境のうちに育つた。人間性を抑壓した封建の生活である。形式にしたがひ奴隷の境遇にあまんじてゐさへすればよかつた。

山主の後継者は寺僧の中から選ばれるが、これには才學は二の次として美男であることが第一の不文律となつてゐる。才學は容易に人目につかないが美男で儀容をたもつて居れば一目でたちまち生佛のやうに信者たちに有難がられる。

明治以後初代二代の山主とも美男だつた。三代目の現住職も美男である。皮膚が白皙で雙眼がすゞしい。白綸子の小袖に紫衣をまとい金欄の袈裟をかけて護摩壇のまへにすわり、白い掌のうちに黒耀の珠数をしづかにつまぐつてゐる姿は高貴の生れの人のやうにみやびやかである。信者の老婆などは涙をうかべながらその前に頭をたれてゐる。

寛も美男だつた。容貌にどこか現山主と酷似したところがあつた。そのため寛は山主と大阪南地の名妓の間に生れた子供であらうと一般に信じられてゐた。名義は農民の子になつてゐるけれども、そのやうな戸籍上のからくりはどうにでもできる。

しかしその祕密をはつきりと知つた者は誰もゐない。たゞさうした推察で寛をそののかす人々があつた。やがて寛が山主の後繼者にえらばれた際、彼の庇護を期待するからである。

寛は子供心にいつか人々の説を信じるやうになつた。また山主が父であることは、寛にとつて悪いことではなかつた。名もない農民の子供である事實とはくらべものにならない。そのうへ次の山主になれるといふ豫想は、まのあたり山主の威勢や豪奢な生活を見聞きしてゐるので、何よりも彼の名譽心を喜ばした。

もつとも寛は寺にゐた長い間、山主から父親らしい温情はおろか、親しい言葉さへかけてもらつたことがなかつた。寛と山主の地位は懸絶してゐた。

寛は宿房の大廣間に他の雛僧たちといつしよに起居してゐた。山主は別棟の御殿のやうな僧房に姿をみせず生活してゐる。衆僧の間にはそれぞれきびしい階級の差別があつて、おのおの受持の役割がきまつてゐる。山主の小用を勤めるのはもつと古參の少青年達だ。寛等は廣間の拭掃除、寺僧等の使走り、朝夕の勤行を習はせられる日課だけで山主に近づく機會がない。